

この本は、長崎大学の教養教育科目「核兵器とは何か」を受講した大学生たちとの質疑応答の中から生まれました。

ご存じのように、長崎は世界で二番目に核の惨禍を経験した街です。七五年前の八月九日、米軍のB29爆撃機が投下した一発の原子爆弾は多くの人々の命を奪い、心と体に深い傷を負わせました。爆心地からわずか五〇〇メートルの地点にあった長崎大学の前身の一つ、長崎医科大学でも多くの医学生らが犠牲となり、九死に一生を得た者たちは傷つきながらも助けを求める街の人々の救護に尽くしました。

「核兵器のある世界」に生まれた現在の若者たちに、遠い世界の出来事ではなく、「自分事」としてこの問題に向き合い、より良い未来を生み出す力をつけてほしい。そんな思いから、核問題を多角的、主體的に学ぶ「核兵器とは何か」の科目を二〇一三年にスタートさせました。

授業を進めていく中で、「核問題になんか興味がない」という若者評は正しくないという確信を持ちました。むしろ、大学生たちの心を遠ざけてきた原因の一つは、平和や核に関するこれまでの学習で彼らがしばしば感じてきた、ある種の「押しつけ感」「閉塞感」ではないかと感じたのです。

「原爆は怖い」「戦争は嫌だ」——平和学習を通じて、こういった思いを若者が抱くことには意味があります。しかし多くの場合、若者たちは「その先」を具体的に学んだり考えたりする機会を持つに至っ

ていません。「ではどうすればいいのか」「自分に何ができるのか」といった思いには、行き場が与えられていない。そのために、「どうせ『平和は大事』って言わせたいんでしょ」「答えが決まっているからつまらない」といった反応になってしまっているのです。

過去を学ぶことはそれ自体が目的ではなく、《今》を知り、《未来》を創るための基盤づくりとして初めて活きてくるのだと思います。

核兵器の問題に「正解」はありません。環境や貧困の問題と同じ、地球的課題として、全世界の人々がまさに「人類の生存」をかけて知恵を絞り、力をあわせていくべき問題です。これほど多くの人々が「核兵器のない世界」を願っているにもかかわらず、私たちは今も「核兵器のある世界」に住み続けています。この現状を打開する道はどこにあるのでしょうか？

各章で取り上げた問いは、実際に授業の中で出されたものばかりです。それらの素朴かつ核心を突いた数々の疑問に対し、教員の側もウンウンとうなりながら、大学生たちと一緒に答えを探していったのが本書です。読者の皆さんもぜひ「正解のない問い」を一緒に考えてみてください。

二〇二〇年一月

著者